（５）鶴崎のまちと祭礼にみる歴史的風致

１）はじめに

鶴崎のまちは、江戸時代熊本藩領となり、参勤交代の際の藩主休憩所としてまた豊後の熊本藩領を統治する拠点として「御茶屋」が設けられ、港や町が整備された。港は参勤交代の「御座船」波奈之丸のほか、京や大坂方面との商業のための船が出入りしにぎわっていた。現在も剣八幡神社、法心寺をはじめ多くの神社仏閣があり、幕末の思想家毛利空桑の旧宅と塾跡の建物も残されている。鶴崎地区では、熊本との歴史的つながりを大切にしようとする気風が今もあり、小学校の修学旅行先に熊本が選択されるなど、独特の地域性を保っている。

２）建造物

剣八幡神社

剣八幡神社は、正保5年（1645）熊本藩主細川光尚によって創建された。拝殿は入母屋造銅板葺で千鳥破風が付き、唐破風のある向拝を設けている。『大日本帝國大分県社寺名勝圖録』より明治32年（1899）以前に建築されたことが分かる。平成3年（1991）に倒木により外壁が破損したため修理を行っている。本殿は三間社流造で建築年代は不明である。

剣八幡神社拝殿

法心寺

法心寺は、慶長6年（1601）熊本藩主加藤清正によって建立された。山門（仁王門）は入母屋造本瓦葺で軒唐破風がつき、屋根を三手先の組物で支える伝統的建造物であり明治23年（1890）の『豊後国大分郡寺院明細帳』に記載がありそれ以前の建築である。本堂は入母屋造本瓦葺で『鶴崎地方歴史年表』（昭和51年（1976））によれば明治44年（1910）の建築である。

法心寺山門（仁王門）

法心寺本堂

毛利空桑旧宅「天勝堂」・塾跡「知来館」（県指定史跡）

旧宅「天勝堂」は、『毛利空桑全集』（昭和7年（1932））によれば安政4年（1857）に建築された切妻造二階建桟瓦葺の住宅である。塾跡「知来館」は、旧宅と同年の建築で、切妻造二階建桟瓦葺で、1階部分で塾生が生活し、二階が塾としての勉学の場であった。

毛利空桑旧宅「天勝堂」

毛利空桑塾跡「知来館」

姫之宮春日社

姫之宮春日社は、石碑碑文より昭和18年（1943）改築である。剣八幡神社の祭礼で神輿が立ち寄るところで、拝殿は近年の建築であるが、本殿は一間社流造銅板葺で、また拝殿前の石鳥居は延享5年（1748）建築である。

姫之宮春日社

３）活動

３）-１剣八幡神社春季大祭

剣八幡神社は正保5年（1645）熊本藩主細川光尚によって創建された。寛文元年（1661）に細川綱利によって神輿が奉納されたことが祭りのはじまりとされる。現在は4月の第1日曜日に行われている。明治30年（1897）の『神社慣例』によると、当時は祭礼日が旧暦6月17日18日で、「屋台幟山、鉄砲、弓、鉾、槍等古来ヨリ蔵備ヒ係ルモノヲ以テ行列トス」とあり、現在の祭礼では「幟山」が「ケンカ山車」、「鉄砲、弓、鉾、槍」が「鉾」のみとなっている。4本の棒を井桁に組み合わせ、台をのせた「ケンカ山車」を担いで巡行し、「おりゃ、おりゃ」の掛け声に合わせて「太鼓山車」の太鼓が打ち鳴らされる。最大の見せ場は他町の山車と激しくぶつかりあい力比べをする「けんか」で、担ぎ手を鼓舞するかのように太鼓の拍子が早くなる。このため本祭礼は「けんか祭り」とも呼ばれる。

大祭当日は神事の後、午後12時すぎに宮出しが行われる。三軒町、国宗、中央、寺司、山川の5地区が出す「ケンカ山車」は、宮出しにあわせて境内に集まってくる。神輿は、境内を3周したのち町内に出るが、その際山車は神輿が出ようとするのを邪魔する。境内を出ると神輿の先導で町内各地を巡行する。巡行は一旦南下した後北上、商店街を西へ進み、再び東へ向かって午後6時に鶴崎大神宮に入る。この間、獅子を先頭に神輿がつづき、国宗、西町の2地区が出す「太鼓山車」が笛や太鼓で渡り拍子を奏でながらJR日豊本線北側にある姫之宮春日社に立ち寄る。剣八幡神社には午後7時に戻り、宮入となる。巡行中、歩行者天国となっている商店街と鶴崎大神宮北のグラウンドで山車のけんかが行われる。

宮出し

神輿を妨害する山車

町内を巡行する山車

山車のけんか

祭りでけんかをするのは「三軒町」と「国宗」である。「三軒町」は職人が居住し、「国宗」は商人が居住した町であり、祭りの時に町の面子（めんつ）をかけてぶつけあうという。

ケンカ山車

三軒町

国宗

中央

寺司

山川

太鼓山車

国宗

西町

平成３０（２０１８）年の祭礼に参加した山車の種類と地域名

３）-２二十三夜祭

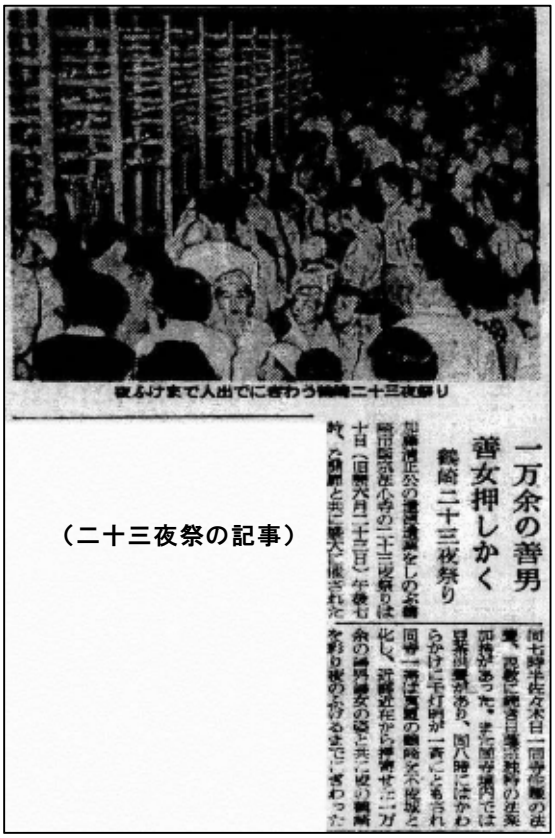
初代熊本藩主加藤清正の命日が旧暦6月24日であることから、その前日に供養を行う「逮夜」が由来とされ、加藤清正が建てた法心寺によって供養が執り行われる。

昭和30年（1955）7月24日『大分合同新聞』朝刊に「一万人余の善男善女押しかく　鶴崎二十三夜まつり」の見出しで記事が掲載されており、当時は旧暦6月23日に行われていることや、住職による供養のの

法心寺清正公廟に参拝する人々

二十三夜祭当日の毛利空桑塾跡前

豆茶の振る舞い



夜ふけまで人出でにぎわう鶴崎二十三夜祭り

一万余の善男善女押しかく

鶴崎二十三夜祭り

（二十三夜祭の記事）

昭和３０年（１９５５）７月２４日
『大分合同新聞』朝刊

豆茶

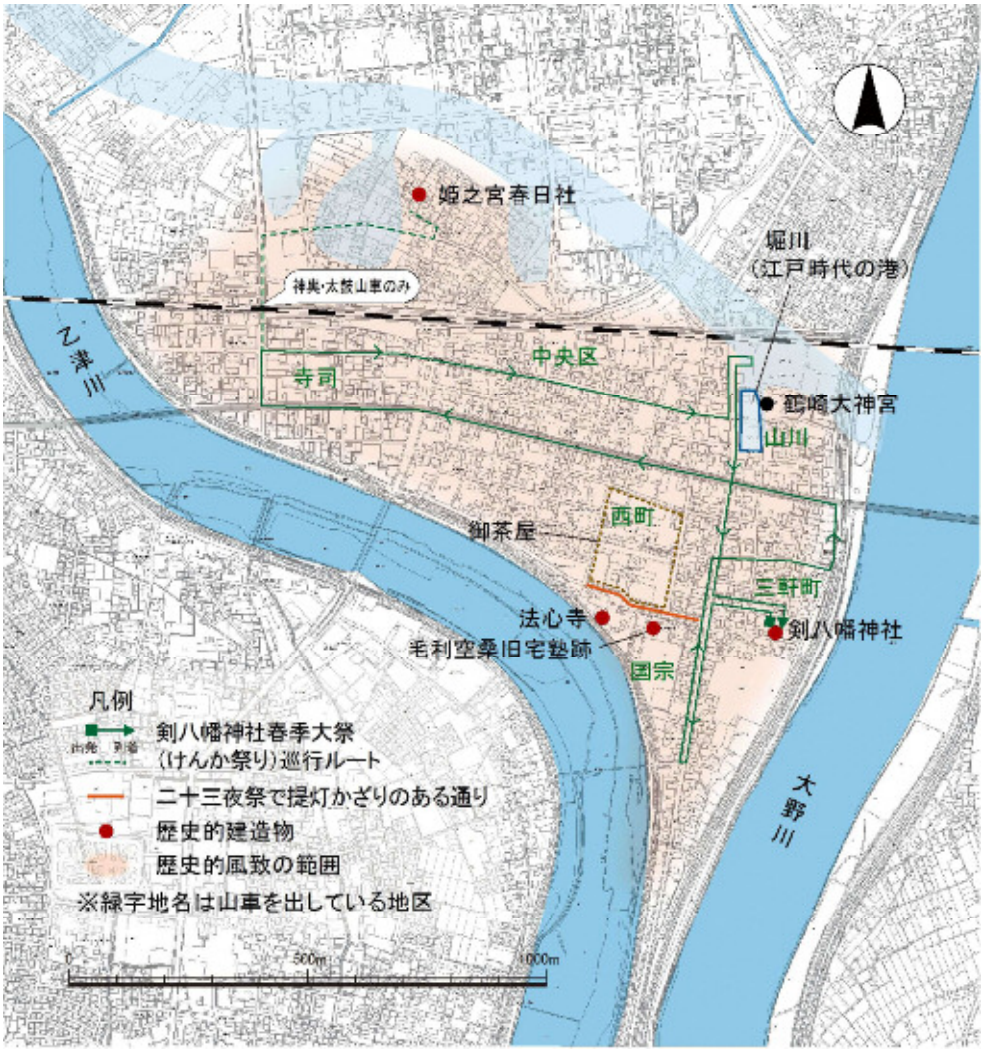
千灯明

ち参拝者に説教が行われたこと、「かわらけ」に灯明がともされること、多くの人でにぎわっていることなどが分かる。

法心寺では午後7時より加藤清正の供養が行われ多くの人が数珠を手に本堂へ参拝する。法心寺へ向う道沿いにある「毛利空桑記念館」周辺には地域の方々が提灯をとりつけて、祭りの雰囲気を盛り上げている。また、鶴崎の港を出入りする加藤清正を見送りお迎えするのに明かりを灯したという故事にならい、本堂前の参道横で灯明皿に火をともす「千灯明」も参拝者によってと灯されている。参拝者には加藤清正が家臣の士気を高め、栄養を摂らせようとして麦茶の中に大豆をいれた「豆茶」がふるまわれる。また、昭和51年(1976)より地元商工会議所と連携し地区中心部の国道197号を歩行者天国にするなど様々なイベントが同時に開催され、鶴崎地区の一大行事となっている。

4）まとめ

熊本藩とのつながりに起源をもつ剣八幡神社や法心寺といった建造物とそれと関わる祭礼が今も受け継がれており、まちなみと一体となった鶴崎の歴史的風致となっている。



鶴崎の歴史的風致範囲図